

2016年3月修了
修士論文要旨

日本におけるフェアトレード普及プロセスの分析

ーフェアトレードタウン名古屋を対象にー

毛受沙紀

47-146786

東京大学大学院 新領域創成科学研究科 国際協力学専攻
指導教員 本田利器教授

キーワード：フェアトレード，フェアトレードタウン，普及プロセス，価値共創，消費者態度，精緻化見込みモデル，エシカル，持続可能性

1. 背景

フェアトレード普及の課題は、フェアトレードが現行の貿易の代替システムであり開発途上国の貧困解決につながるという価値を持っていることが、先進国の一般消費者にとって実感しにくいという点である。この課題を解決するための既往研究では、普及活動における事実関係を追うことによってその成功要因を抽出するものは多く見られるが、市民の意識変化プロセスは必ずしも明らかにされていない^[1]。

2. 目的

本研究では、名古屋におけるフェアトレード活動者の活動変遷と、それによる市民の意識変容を追う。それにより、フェアトレード活動者がどのような意図でフェアトレードを地域に広めて市民はフェアトレードの「何」に

共感したのかを分析し、日本における持続可能なフェアトレード普及に資するアプローチを得ることを目的とする。

フェアトレードの研究では、市場を検証するアプローチがとられることが多いが、ここでの「普及」とは、単にフェアトレード商品が市場でシェアを獲得することではなく、より多くの市民がフェアトレードに共感・賛同することである。

3. 分析手法

分析対象事例として2015年9月19日に「フェアトレードタウン」認定都市となった名古屋市を用い、名古屋で長年にわたってフェアトレード活動を継続している人々が、ワークショップやフェアトレード・ショップ経営を通して市民とどのような対話をし、その市民がどのように意識変化をした

のかというプロセスを明らかにする。

市民の意識変化の過程を分析するにあたり、価値共創プロセスに着目し、精緻化見込みモデルと合わせて普及アプローチの解釈に用いた。まず価値共創理論の観点より、市民との対話によって生み出されたフェアトレードの新たな価値を分析し、次にそれがどのように本質的な価値と結びついて持続可能な普及を可能にするのかについて、精緻化見込みモデルの原理を用いて分析した。

4. 結果と考察

名古屋におけるフェアトレードの普及プロセスでは、市民がいきなり本質的な価値に共感して行動変化を遂げるのではなく、価値共創がおこなわれていることがインタビュー調査とその分析によって明らかとなった。トップダウン型とボトムアップ型という、対照的な異なる対話プロセスを経た市民は、どちらも自分の住むコミュニティ或いは自分自身に足りないものが、生産者のコミュニティにはいまだに残っていることを知る。例えば相互扶助の精神など、人として本来持つべき精神が自分たちの生活では失われていることに気づく。このような、普段気づくことのできない事実気づいた時、人々は独特の喜びを味わい、気づかせてくれたフェアトレードの価値を高く置く。そして、本質的な価値の普及を目的としたフェアトレード活動を自発的におこなうようになる。

この普及プロセスは、他の地域での

フェアトレード普及にも用いることができるだけでなく、潜在的な価値を含んでいる可能性のある新規の倫理的な概念の普及の一助となることが示唆される。

一方、「フェアトレードタウン運動」の変遷からは、既往研究で欧米の成功要因として挙げられている要素の多くが、名古屋のタウン運動でも揃っていることが明らかとなった。それと同時に、「エシカル」という、フェアトレードよりも包括的でファッションブルな概念が、フェアトレードタウン運動を後押ししてフェアトレードタウン認定に至ったことも明らかとなった。

5. 結論

それまでフェアトレードを知らなかった市民や関心を持っていなかった市民を巻き込み、市民全体の意識の底上げをおこなうには、タウン運動の過程と成功が必要である。しかし、フェアトレードタウンに認定されることがゴールなのではなく、持続可能なフェアトレードの普及を目指すことが本来の狙いであることを考えると、本論文で明らかとなったような活動者と市民との価値共創による普及プロセスは、今後の持続可能なフェアトレードの運動とその普及に一定の示唆を与えるものであると考えられる。

【参考文献】

- [1] Andorfer, V.A. (2012). Research on fair trade consumption—A review. *Journal of Business Ethics*, 106(4), p.415-435.